

広報はしもと2015年8月号

前畑秀子ストーリー

第一話
プロローグ

歴史は先人たちの積み重ねによってつくりられ、記録は新たな挑戦者によつて塗り替えられます。しかし、どちらもしじまりの一步を記す人がいなければ、積み重ねることも塗り替えることもできません。

1936（昭和11）年8月11日、現在に繋がるはじめの一步が、遠く離れた地、ベルリンで記されました。その一步を刻んだ人物は、伊都郡橋本町（現橋本市）出身の前畑秀子さんです。

前畑さんが日本女性初のオリンピック金メダリスト（女子200m平泳ぎ）であることは、説明する必要もありませんね。しかし、前畑さんが水泳を通して何を学び、生涯を通じて何を伝えようとしていたのかを知る人は数少ないと思います。

こうした視点から前畑さんの人生を振り返ってみると、前畑という人が日本オリンピック史に、女性スポーツ史に、そして、ここ橋本に残した「何か」が見えてくるはずですよ。

次月号からは、前畑さんの人生の軌跡を皆さんとともに辿って行きたいと思っています。旅のスタート地点は、前畑さんのはじまりの場所、橋本。ナビゲーターは、木村華織（東海学園大学）。長旅になりますが、どうかお付き合いください。

広報はしもと2015年9月号

前畑秀子ストーリー

第二話
はじまりの人

前畑さんが選手として活躍した1920年代から30年代は、日本の女性スポーツ草創期といわれています。1920年以降、高等女学校の生徒を対象にした競技会が漸次増加していきましました。女子選手に国際大会出場の道がひらかれたのも、この頃からです。

陸上競技の人見絹枝さんが、第2回国際女子競技大会に出場するために、単身で渡欧した1926年から3年後の1929年、日本の女子選手団としては初となる海外遠征が実現しました。派遣されたのは女子水泳の選手団であり、その一人が、橋本尋常小学校高等科に在籍していた前畑さんでした。

前畑さんは初の海外遠征となった全米女子水上競技選手権大会（ハワイ）において、平泳ぎ100mで優勝、同200mでも2位という成績を残しました。以降、前畑さんを取り巻く状況は少しずつ変化していくことになります。

この年の十月、彼女は相山第二高等女学校に編入し、創部されたばかりの水泳部で本格的に選手生活をスタートさせました。そして、日本水上競技連盟が女子選手の強化や普及に乗り出したのも、ちょうどこの頃だったのです。

女子水泳界の状況が変化を見せはじめ、今に続く土台を作ろうとするその時期に、前畑さんが存在することになるのです。

広報はしもと2015年10月号

前畑秀子ストーリー

第三話
旅のはじまり

先月号では、日本の女性スポーツが国際化を遂げていく時期、そして女子水泳を取り巻く状況が変化し始める時期に、前畑さんが選手として存在していたことをお話ししました。今月号からは、前畑さんの軌跡をたどる旅の始まりです。

多くの場合、前畑さんの功績は「日本女性初のオリンピック金メダリスト」という点に集約されてしまっています。しかし、前畑さんの功績を知るためには、彼女が行なってきたことを長い時間軸の中で俯瞰して見る必要があるでしょう。

前畑さんは自らの言葉である「一に努力、二に努力、三また努力」を体現し、金メダル獲得を現実のものにしました。その背景にはどのような努力や苦労、そして出会いがあったのでしょうか。また、生涯を通じて水泳に携わり、脳溢血という大病を煩った後もなお、プールサイドに立ち続けたのはなぜでしょうか。

これらの答えを見つける旅のスタート地点は、前畑秀子生誕の地「橋本」です。橋本は市の中心部を東西にわたって紀の川が流れる水の豊かな地域です。当時の妻の浦は川幅が百メートル近くあり、水量は現在の四倍とも五倍ともいわれています。前畑さんの遊び場だった紀の川、そこに天然プールを造り水泳指導を始め、橋本小など、前畑さんの誕生に欠かせない場所や時間が、ここにあるのです。

広報はしもと2015年11月号

前畑秀子ストーリー

第四話

紀の川という場所



本人にとつてはごく当たり前だと思っていたことが、後の人生を方向づける重要な場所や時間になることがあります。当時の紀の川では、夏になると老若男女を問わず多くの人たちが水遊びを楽しんでいました。前畑さんもその一人です。そんな当たり前の場所が、金メダリスト前畑秀子の誕生には欠かせない場所だったのです。

当時は、プールをもつ学校などほとんどありません。そのため、水泳の実施や選手誕生には、地理的な環境が多分に影響していました。それを示すように、昭和戦前期には、奈良県を流れる吉野川や和歌山県を流れる紀の川沿いに位置する小・中学校から、多くの水泳選手が誕生しています。女子水泳では前畑さんの他にも、1932年ロサンゼルス五輪、1936年のベルリン五輪に出場した橋本小出身の小島一枝さん、妙寺小出身の守岡初子さんがいます。両大会に出場している女子選手は、前畑さんを含めこの3人だけです。

オリンピック出場時には、プールの備わった異郷の地で生活していた3人ですが、「水泳を続ける」という新たな道を拓いたという意味でも、紀の川の存在は欠かすことができません。そして、この場所に天然プールを造って水泳指導を始めた橋本小学校の存在もまた、見逃すことはできないでしょう。

広報はしもと2015年12月号

前畑秀子ストーリー

第五話

橋本小学校の存在



偉大な選手誕生の背景には、本人の能力はもちろんのこと、地理、施設、人、そして経済的なことなど、様々な要因があります。それら複数の要因が時や場所その組み合わせを変えながら、歯車となつて選手を一流へと押し上げていくのです。

紀の川の存在が、前畑さんの人生を方向づける一要因であったことは、前号で述べた通りです。今号からは、前畑さんの母校である橋本尋常高等小学校（以下橋本小）に焦点をあてたいと思います。

橋本小の水泳部が創部されたのは、前畑さんが小学4年生になった1924（大正13）年です。この前年、学校長である西中武吉先生の発案により、3年生以上を対象にした水泳指導が紀の川で行われました。そして最終日の試験で、1000mを完泳した生徒を部員に、水泳部が創部されました。前畑さんも蛙泳ぎと犬かき泳ぎを駆使して必死に泳ぎ切り、最年少部員として水泳部に名を連ねたのです。まさに選手、前畑秀子の始まりの時です。

これ以降、昭和戦前期において、橋本小は全国でも有数の水泳強豪校として名を轟かせて行きます。

水泳好きの少女を選手へと導いた橋本小の存在は大きく、またこの頃を境に、彼女を取り巻く様々な歯車が、少しずつ動き始めていくのです。

広報はしもと2016年1月号

前畑秀子ストーリー

第六話

最初の歯車



前畑さんを一流へと押し上げるための最初の歯車は、紀の川に造られた天然プールとそれを造った熱心な橋本小の教員たちだったのではないのでしょうか。

橋本小水泳部の練習は、紀の川にある湾の中に天然プールを造って行われていました。川底に向かって杭を打ち、片側は杭の上に板を張ってスタート用に、もう片側はターンができるように板を杭に沿わせるようにして水中に打ちつけ、最後に縄でコースロープを張り完成です。とはいえ、台風や大雨に見舞われればひとたまりもありません。その度に教員たちがプールを造り直すのです。

前畑さんの自伝によれば、水泳部の指導は西中武吉校長の他、4名の教員が行なっていたといいます。当時はまだ、クロールや平泳ぎなどの近代泳法が一般に普及されていない時代です。そのため指導できる人も少なく、橋本小の教員たちは大阪まで泳法を習いに掛けは、部員たちに教授していました。

天然プールとそこでの教員たちの姿が、前畑さんに平泳ぎとの出会いをもたらした、彼女の人生を予想もしない方向へと向かわせていくのです。諦めかけていた高等学校への進学は、その始まりだったのでしょうか。カチンカチンという音が聞こえてきませんか？

（木村華織）

広報はしもと2016年2月号

前畑秀子ストーリー

第七話

初出場・初優勝



橋本小学校に水泳部が創部されて一年が経ち、前畑さんも5年生になりました。この年（1925年）、大阪の浜寺プールで行われる学童水泳大会に橋本小水泳部も参加することになりました。前畑さんのデビュー戦です。さすがの前畑さんも初めて目にする試合用の立派なプールには怖じ気づいてしまったようですが、試合が始まってしまえば何の其の、結果は50m平泳ぎ・学童新記録で優勝です。彼女の勢いはもう止まりません。6年生になって迎えた2度目のシーズン、大阪で行われた第2回全日本学童競泳大会では、50m平泳ぎ、50m自由形、100mリレーの3種目で優勝。同年の第3回日本女子オリンピック大会では、100m平泳ぎ、200mリレーで優勝を果たしました。リレーは当時の学童新記録です。そして翌年には、平泳ぎで日本新記録を樹立することになります。

瞬く間に日本一になり、平泳ぎの選手として名を残すことになる前畑さんですが、実は自由形もかなりの実力の持ち主だったようです。また、前畑さんの活躍ばかりに目が行きがちですが、チームで出場するリレーでの優勝は、橋本小水泳部の飛躍の証です。彼女を後押ししていたものは何かという視点から当時を振り返ると、そこには切磋琢磨できる仲間が存在もみえてくるのです。（木村華織）

広報はしもと2016年3月号

前畑秀子ストーリー

第八話

ひらかれた道



水泳選手として頭角を現し始めた前畑さんでしたが、小学校卒業の時が迫っていました。卒業後は家業を手伝わなければならないと考えていた前畑さんにとって、高等科進学は夢のまた夢でした。しかし懸命に努力する姿が西中学校長や両親の心を動かし、進学の道をひらいたのです。「努力の人」といわれる前畑さんの原点は、「人間は、何事にも全力を尽くしていれば自然に進む道がひらける」とことを実感した、この時にあったのです。

あきらめかけていた水泳が再びできるようになった前畑さんは、1927（昭和2）年以降、一般女子の部においても次々と日本新記録を樹立していきます。他方、前畑さんが活躍を始めるこの時期は、日本の女性スポーツが変化をみせ始める時期でもありました。アメリカ・オーストラリアを招いて行われた1927年の汎太平洋水上大会では、日本の女子水泳選手にとって初の国際大会出場が実現し、翌年には陸上競技の人見絹枝さんが日本女性初のオリンピック（阿姆斯特ダム）出場を果たしました。そして国際化の流れは、現実のものとなって前畑さんにもやってくるのです。前畑さんの努力が自身の道をひらき、先に生きた女性選手たちの努力と挑戦が、彼女の後の人生を後押ししていくでしょう。（木村華織）

広報はしもと2016年4月号

前畑秀子ストーリー

第九話

世界への第一歩



1929（昭和4）年、前畑さんにも国際大会出場機会がやってきました。この年、全米女子水上競技選手権大会がハワイで開催されることとなり、日本の女性選手たちにも招待状が届きました。国内予選会の結果、前畑さんを含む4名の選手が派遣されることになりました。ついに、女子水泳選手の海外遠征の口火が切られたのです。

試合当日（8月10日）は、国内予選会で日本新記録を樹立した前畑さんに注目が集まりました。200m平泳ぎは、アメリカの第一人者ゲラティ選手との一騎打ちです。前畑さんは、レース中盤で2m近くリードしたものの、接戦の末、惜敗してしまします。しかし、ゲラティ選手は試合後にこんなことを述べたそうです。「私にとっては今までこれほど苦戦したことはない」。これに対し前畑さんは「ただ一生懸命でした」とのみ語ったそうです（大日本体育協会史下巻より）。帰国後、前畑さんは名古屋にある相山第二高等女学校に編入することになります。日本の女性選手団としても初めての海外派遣となったハワイ遠征は、前畑さんの人生の行路を決定づける重要な機会だったといえるでしょう。そして、ここでもまた、一生懸命に全力を尽くした結果が、次に繋がる道をひらいたのです。（木村華織）

広報はしもと2016年5月号

前畑秀子ストーリー

第十話

名古屋へ



ハワイから帰国した前畑さんが目にしたのは、歓喜に溢れた橋本町民の姿でした。しかし前畑さんの胸中は複雑でした。「高等科を卒業したらもう泳げなくなる」という思いが巡っていたからです。

そんなとき、名古屋にある相山女学園（当時の相山第二高等女学校）から、自校で行う女子学童競泳大会で模範水泳をして欲しいという話が舞い込んできたのです。

相山女学園は、第一次世界大戦後の女子教育において、体育や運動の奨励に力を入れていた女学校の一つです。1924年の開設以降、運動施設の拡充と近代化を図り、1928年には国内の高等女学校初となる屋内プールを設置しました。相山女学園の教育方針が変化し始める頃に、前畑さんが活躍を始めたのです。

ハワイから帰国した前畑さんは、西中学校とともに相山第二高女を訪れました。そして模範水泳終了後、相山第二高女の相山正式校長から編入の誘いを受けたそうです。それから約一カ月後の1929年10月5日、彼女は相山第二高女3年生に編入しました。

どのような経緯で編入に至ったのかは定かではありません。しかし、西中学校と相山校長が、選手・前畑秀子誕生の陰の立役者であることに違いはなさそうです。

（木村華織）

広報はしもと2016年6月号

前畑秀子ストーリー

第十一話

模範水泳



今号では、前畑さんが参加した相山女学園での模範水泳の様子を、相山女学園の校友会誌「糸菊」（昭和4年号）の記事からみていきたいと思います。「糸菊」には、当日の様子が次のように記されています。

「プログラムは進み前畑さんの遊泳の番が来た。スタンドはどよめき渡り『水の女王』『水の女王』あの年若い娘がハワイまで遠征し日本女子の為に気を吐いてくれたのかなどの声が聞こえる。〈略〉今スタートについた十六歳と思われぬ均整のとれたよく発達した身体水着の胸間には日章旗が輝いている。〈略〉あのスタイルで米国女子水泳レコードホルダーたるゲラティ嬢を破ったのだ。ピストルは鳴った。鮮やかなホーム感嘆せざるを得なかった。観覧者はなりを静めて見守った。やがて自ら上がりつ、ましく一礼して控え室に帰る態度のつ、ましさ。良き印象をあたえずにはおかなかった。」

生徒たちの目に映った前畑さんの姿は、力強さだけでなく、慎ましさも備えた選手として印象づいたようです。前畑さんの編入は、相山女学園にとって新たな女子教育の始まりでもあったのでしょうか。選手としての活躍はもちろんですが、その他にも前畑さんに求められていたものは、多分にあったのかもしれない。

（木村華織）

広報はしもと2016年7月号

前畑秀子ストーリー

第十二話

スタートライン



何事にも全力を尽くす前畑さんの姿が、彼女の人生に新たな道をひらき、相山女学園への編入を現実のものとなりました。小学校時代から活躍していた前畑さんですが、本格的な選手生活のスタートは、この時からといって良いでしょう。

編入時の様子を記した「糸菊」の記事には、「学校全体とりわけ部員の待ちもうけた日は来た。お母様と一緒に来校された、無事入学なさった。今日から相山女学校水泳部員として共に技を磨くことが出来るのだ部員の練習振は全く面目を一新した」とあり、学園の歓迎ムードが伝わってきます。前畑さんも新天地に胸を躍らせていたことでしょう。

しかし、前畑さんがついたスタートラインは、単に自己記録への挑戦やライバルとの勝負など、選手としての始まりのみを意味するものではありませんでした。それは、押し寄せるような期待や目に見えない重圧との闘いの始まりでもあったのです。

この先、前畑さんは多くの苦難に直面することになりますが、彼女は「どんなにいい記録がでて、自分一人で泳いでいると思っていけないよ。〈略〉たくさんの方が後押ししてくれるから、泳げるんだと思わなければいけないよ」という母からの教えを支えに、それら乗り越えていくのです。

（木村華織）